日本人研究者による本格的台湾文学史の試み

垂水　千恵

中島利郎・河原功・下村作次郎編
台湾近現代文学史

A5判　542頁
研文出版
［本体 8000円＋税］

本著は、日本人研究者の手による最初の本格的な台湾文学史の試みである。「序章　台湾文学航海図」で示されているように、島田謹二『華麗島文学志――日本詩人の台湾体験』（明治書院、一九九五）や尾崎秀樹の『近代文学の傷痕――旧植民地文学論』（岩波書店、一九九一）など、日本統治期の台湾における文学に関する書籍は刊行されていたし、本書の編者の一人である河原功による『台湾新文学運動の展開――日本文学との接点』（研文出版、一九九七）も、一九三〇年代の新文学運動期を中心とした、重要な成果であった。

一方、台湾ではこれまで陳少廷の『台湾新文学運動簡史』（聯経出版社、一九七七）に始まり、葉石濤『台湾文学史綱』（文学界雑誌社、一九八七）、彭瑞金『台湾新文学運動四十年』（自立晩報社文化出版部、一九九一）が刊行され、後二者は本書の筆頭編者である中島利郎、および執筆者の一人である澤井律之によって『台湾文学史』（研文出版、二〇〇〇）、『台湾新文学運動四〇年』（東方書店、二〇〇五）として翻訳も刊行されている。さらに、二〇一一年には一九二〇年代から二〇〇〇年代までをカバーした陳芳明による八〇〇余頁にわたる本格的文学史『台湾新文学史』（聯経出版社）が刊行されたことは記憶に新しい。この陳芳明の『台湾新文学史』の翻訳もまた、本書の編者の一人である下村作次郎によって計画され、来年度中には刊行予定と聞いている。

日本における台湾文学の読者数がどれぐらいであるかは寡聞にして知らないが、最近の小説の翻訳としては最も注目を集めた国書刊行会シリーズの発行部数が最盛時でも二〇〇〇部程度であることから、その辺が最大数というところだろう

か？　こうした中で、近刊も含めれば三冊の台湾文学史に関する翻訳書が刊行され、しかも、日本人研究者の手による五〇〇頁を越える台湾文学史が刊行される、ということは、他の地域文学には見られない、台湾文学の大きな特徴とも言えるであろう。

特に日本人研究者による文学史記述となると、前述のように日本統治期のものが中心であり、藤井省三『台湾文学この百年』（東方書店、一九九八）、山口守編『講座　台湾文学』（国書刊行会、二〇〇三）のような少数の例外を除けば、戦後について概括的に論じられることが少なかっただけに、本書刊行の意義は大きい。

では、まず本書の内容を紹介しておこう。本書は前述の「序章　台湾文学航海図」に引き続き、三人の編者を含む九名の執筆者に拠る一三の章と下村作次郎編の「年表」、および中島利郎の「あとがき」から構成されている。一三の章の内訳は「第一章　台湾新文学の黎明」、「第二章　頼和とその仲間たち」、「第三章　東京から台湾へ」、「第四章　日章旗の下の台湾文学（四〇年代）」、「第五章　呉濁流と葉歩月、そして二・二八事件」、「第六章　反共文学と鍾理和」、「第七章　密かなる成熟」、「第八章　『現代文学』と郷土文学論争（七〇年代～八〇年代）」、「第九章　台湾文学の解放」、「第一〇章　日本統治期台湾における日本人作家の系譜」、「第一一章　日本統治期の台湾文学と「内地」の作家たち」、「第一二章　台湾現代詩の成立と展開」、「第一三章　台湾原住民文学の誕生」である。

こうして、章のタイトルを並べてみただけでも、本書の特色が浮かび出てくる。多くの文学史がそうであるように、本書もゆるやかには編年体の体裁を取っている。しかし、第九章で一九八七年の戒厳令解除以降、二〇〇〇年代に活躍する「六年級生（民国六〇年代、西暦一九七〇年代生まれ）」の作家の活動を紹介した後、一〇章は日本統治時代へと急に時代が遡る。そしてその後の四章はそれぞれテーマ別に独立している、という訳である。

こうした構成に対して、中島は「あとがき」において、「戦前に限ってだが、近代文学成立期から登場する日本人作家を編年式の文学史で記述する場合には、各章各年代に分散して「その流れを有機的に摑みにくい」ため、「「史記」の「紀伝体」にヒントを得て、それを文学史記述の便法とした」と説明している。

確かに、戦前の日本人作家の文学活動をどのように「台湾」文学史に盛り込むかは、悩むところであろう。台湾側では「序章」にも書かれているように、彭瑞金は日本人作家に言及せず、葉石濤と陳芳明は一九四〇年代の『文芸台湾』の記述に

関連して若干の言及はあるものの、そのボリュームは決して多くない。ましてや、「第一一章」のように、「戦前の日本「内地」文壇で、台湾を題材として作品を発表した」作家たちは、台湾で刊行された台湾文学史で取り上げられるわけもない。とすれば、日本人研究者の手による台湾文学史である本書に期待されるものは、まさにこの点であろう。その意味で、中島の言う「紀伝体」方式は必然のものであったと言えるし、一〇章、一一章が書かれた意義は大きい。

ただ、惜しむらくは、本書は体裁的には中島の言うように「大きく二つに分け」られてはいないことである。多くの読者は（筆者もそうであったように）、九章から一〇章への断絶に、一瞬首を傾げるのではないだろうか。ここは形式上も大きく第一部・第二部と分け、タイトルをつけて提示して欲しかった。また、三人の編者を含む九人の執筆者という大編成ゆえの難しさかもしれないが、各章間の重複が見られたり、逆に各章間、各節間の繋ぎが欠けていたりする場合があるのは残念である。再版の機会には、是非再考をお願いしたい。

しかし、そうしたわずかな瑕疵を除けば、各章、各節の内容は誠に充実したものである。本書のもう一つの特徴は、第二章、第五章、第六章のタイトルに代表されるように、その時期を代表する作家に関する論考を中心として、その時代を語っている点であろう。日本での出版であるだけに、本書で取り上げられた数多の作家・作品に親しんだ上でこの文学史を読む、という読者は想像しにくい。文学史の翻訳が充実しているのに比べ、実際の作品の翻訳量がそれに追いついていない、というのも日本における台湾文学（研究）のアポリアである。もちろん、本書の執筆者を中心とした研究者諸氏の努力によって、状況は幾分改善しているし、特に現代詩および原住民族文学の体系的な翻訳に関しては瞠目すべきものがある。が、それにしても論じられるべき作品はあまりに多く、小説を中心に、翻訳量が圧倒的に不足しているのは事実であろう。

そうした前提に立った場合、各時代の作家・作品を総花的に並べていくよりも、代表的な作家を中心的に論じつつ、その背景を紹介していく、という本書の手法は有効であると思われる。中でも、個人的に興味を覚えたのは、第六章「反共文学と鍾理和」および第七章第二節の「鍾肇政と『台湾文芸』」である。台湾文学史の大きな柱の一つは紛れもなく日本との関係であるが、一方、何故、中国文学ではなく台湾文学なのか、この両者はどういう関係にあるのか、という疑問に答える姿勢を忘れてはなるまい。

例えば、国民党中央党本部が一九五〇年に設立した中華文芸奨金委員会（文奨会）によって、「反共抗ソ」の文芸活動が

奨励され、「一年間に三〇〇〇人が創作し、四〇〇人が文奨会から賞金を受け、三部の長編、その他三〇万字の創作が活字になったというのは、その質がどうであれ、文奨会の文壇における影響力は相当に大きい。はたしてこれが、戒厳令が猛威をふるい、白色テロによって荒れ果てた当時の現実の別の顔でもあったのだろうか」（二二七頁）という指摘などは、非常に興味深く読んだ。陳芳明『台湾新文学史』に拠ると、郷土文学運動の興隆期においても、政府側の機関である台湾省新聞処が、一九六五年から八〇年代半ばに至るまで、七〇余冊にわたる『省政文芸叢書』を刊行、本省・外省作家に台湾農村を主題とする作品の執筆を依頼し、郷土文学に大きな影響を与えたという。国家の政策と文学の関係が一筋縄では捉えきれないことの証左でもあろう。共産党下の中国や戦時下の日本ではどうだったのだろうか、と興味が尽きない。

そうした国家規模での文芸活動が奨励される一方で、鍾理和、鍾肇政といった作家たちが黙々と個人ベースの創作活動を行い、やがては互いに知己となり、連携を深めていく過程は、感動的である。そこに、呉濁流が加わり、やがて葉石濤に引き継がれ、と一種の台湾文学三国志（?）的な面白ささえ感じる。鍾理和、鍾肇政については、何故もっと日本でその作品が紹介されないのかもどかしく思っていたところ、本書巻末の研文出版近刊予告に拠ると、「台湾郷土文学選集」として鍾肇政が二冊、鍾理和が一冊翻訳されるとのこと、本当に楽しみである。

一方、やや残念なのは白先勇以外の『現代文学』派の作家があまり詳しくは紹介されていないことである。これは小説の翻訳にも言えることであり、せめて王文興の『家変』くらいはもっと早くに翻訳されていてもよかった気がする。白先勇もそうだが、中国的な要素とモダニズムがどのように切り結んでいくか、という問題は、考察に値するであろう。

もっとも、それは「第一二章　台湾現代詩の成立と展開」に紙数を譲ったためかもしれない。第一二章では日本経由のモダニズム詩の受容と、台湾人詩人の中国語詩表現の可能性探索の問題が、林亨泰論を中心に深く、かつ多角的に論じられており、学ぶところが多かった。さらにすばらしいことは、本書の執筆者でもある三木直大、池上貞子の尽力により、台湾現代詩の重要作品の多くが翻訳されており、文学史の記述を作品で確認することができることである。

こうしたすばらしさは、台湾原住民族文学にも共通する。台湾文学が研究者だけなく、より広い層の読者を獲得していくためにも、作品翻訳へのいっそうの努力が求められていることを改めて感じさせられる一冊である。

（たるみ・ちえ　横浜国立大学）